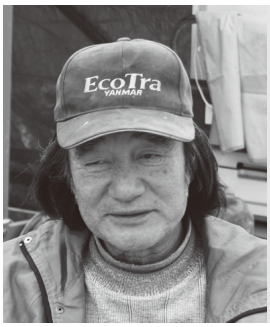
作業受託で農地の良し悪しを学ぶ



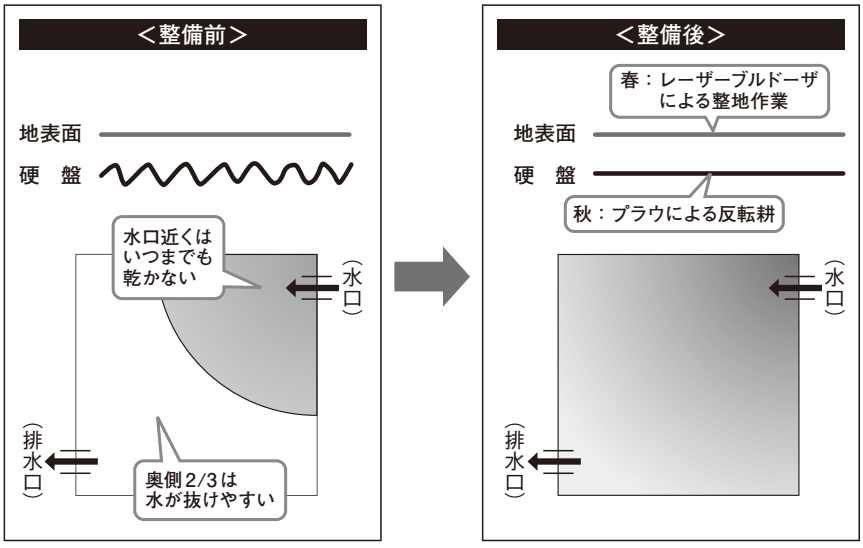
新潟県新潟市

平野廣明 氏（60）

【経営データ】
■経営面積：水稲（コシヒカリ）25ha、作業受託ほか約35ha
■労働構成：本人・妻
■売 り 先：県内の米店、全国の個別顧客

新潟市の湿田地帯でコシヒカリを作付けする平野農園の経営は以前にも紹介した通りだ。〝平らな田んぼ〟を作ってきた経験が、今年度は新しい展開を見せている。表面の均平だけでなく、硬盤の凸凹の均平をできるのが平野廣明氏の仕事術。作業受託で人の農地で作業をする恩恵について聞いた。

図1 “平らな田んぼ”の作り方





▲圃場整備のあらまし。平野氏の目指す“平らな田んぼ”は、地表面の凸凹以上に、硬盤の凸凹を均す作業が肝心だ。地中の水が縦方向にも横方向にも自由に移動できれば、常に新しい水が稲の根に新鮮な空気を運んでくれる。水口付近がいつまでも乾かなければ、水が腐ってしまい、健康な稲が育たない。こういった圃場の良し悪しの見極めは自らの観察によって体得する必要があるという。

◀自宅周辺の圃場は収穫後にプラウにて反転耕が終わっている。冬に向けてこの圃場には水が溜まり、積雪の下では湛水状態になる。

稲作の達人として本誌に何度か登場いただいた平野廣明氏を新潟県に訪ねたところ、今秋は、畔を抜いて圃場の区画を拡大する圃場整備作業で大忙しだったという。聞けば、「補助金でよその田んぼを改善できるなんて、ありがたいね」という言葉が飛び込んできた。

２０１２年度に創設された「農業体質強化基盤整備促進事業」は、畦畔除去、均平作業等による区画拡大に10ａ当たり上限10万円が補助される。これまでも地域の近隣圃場について安い作業料で受託し、地域に〝平らな田んぼ〟を戻してきた彼だから請け負うことができるのだ。

平野氏の経営は、自作地全面にコシヒカリを作付するほか、積極的に地域の水田作業を受託している。必要な農業機械は、ユンボや複数台の大型クローラトラクタに、プラウ、レベラ、バーチカルハローなどの大型の作業機まで自前で購入し、目的に合わせて自ら改良を加えてきた。

今年の収量は12俵に少し足りなかったというが、近隣の平均収量（コ



▲限られた作業人員で適期に作業を遂行するためには、作業機に応じてトラクタが専用機と化す。作業機を付け替える手間を省き、作業効率を上げている。



◀育苗から収穫祭まで多目的に利用している大型の鉄骨ハウス。床にはコンクリートが敷かれ、通常は上記のトラクタの格納庫として利用している。



レベラ作業はフルクローラトラクタで作業する。均平板の端にミラーを搭載。



畦畔を直す作業には欠かせないユンボ。明渠施工にも活躍する。



小さい圃場では、3連のリバーシブルプラウも活躍する。クローラトラクタが主力なので丘曳きをメインに使う。



12インチ×7連の水田用リバーシブルプラウ。接地輪に変えてクローラを装着。

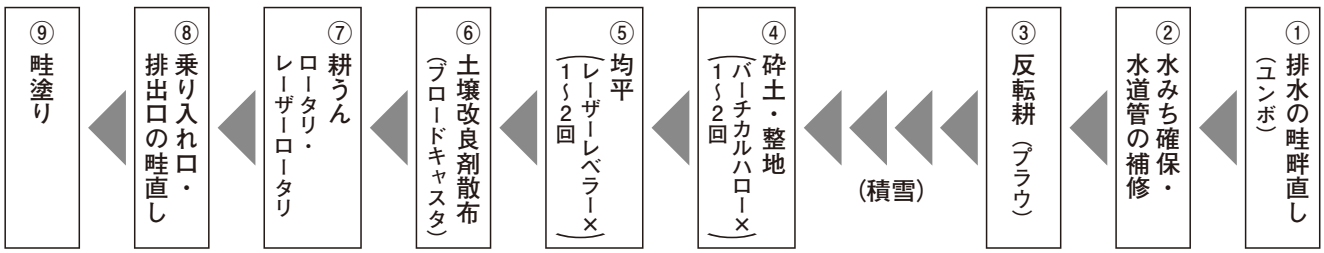


今年の春に導入したJD6430プレミアムの四輪クローラ仕様のトラクタ。湿田地帯ゆえに平野氏は国産のクローラかセミクローラトラクタを選んできた。そこへ一昨年のスガノ農機が主催した佐賀県の実演会で一目見て、購入を決意したそうだ。圃場整備作業が殊のほか忙しく、今年の稼動時間は短かったとか……!?



今年収穫した稲穂。一般的なコシヒカリの稲穂に比べて分けつが少なく細い印象を受ける。平野氏がつくりたいのは「すっきりした稲」だ。今年も12俵弱の平年並みの良食味米を収穫している。くり返し口にするのは「生産性を上げる」というスローガン。意味するのは、収量競争で1俵でも2俵でも多く取ること。長年の研究を経て確立した栽培方法は、大型機械の導入だけではない。施肥量は、元肥ゼロでへの字に従って窒素成分で1.5kg/10aだけ。極端に少ないが、これが達人の技である。

図2　圃場整備作業の工程



シヒカリBL）8〜9俵を3〜4俵も上回る。全面コシヒカリを作付けし減反に参加していないため、戸別所得保障制度や転作奨励金の恩恵は受けていない。昨年の米価が60kg当たり1400円高だったので、今年は仮渡金で同1万5500円という相場だが、同氏の販売価格は平年通りの1万5000円のまま。

稲を観察し、施肥体系を確立してきた結果、元肥は与えず、「への字」型の施肥体系で窒素成分10a当たり1・5kgと少ない。田んぼを作り、少ない分けつで登熟率の優れた稲を育てる。コストを下げる努力の結果、「米価がキロ1万円になっても生き残れるよ」と明言できるのだ。

今回の受託事業について、「土木コンサルとして預かって作業をすれば、その圃場が良い農地かどうかが分かる。高価な機械への先行投資も圃場の生産性が上がるのなら意味がある。その代わり、生産性の上がらない農地は今後引き受けてはいけないことが分かる」と話す。つまり、技術レベルの研鑽だけでなく、圃場に入って良し悪しを調べることができる絶好の機会と捉えているのだ。人から農地を借りても12俵程度の収量が期待できる圃場を見極めることこそ、この事業の恩恵なのだろう。

（加藤　祐子）